

『學問』の語義について

木村 俊 夫

一 序 論

我々わ日常『學問』とゆう言葉に至極常識的に用いて居る。學問内容に關してわ、一言一句と雖も之を忽せにしない學者も、『學問』とゆう言葉の意味に關してわ、余り注意を拂つて居ない様である。即ちその多くわ、今日の日本の社會に於て、廣く一般に用いられて居るところを無反省にそのまま慣用して居る、とゆうのが實情であらう。それを私わ咎めようとわ思わない。一般にわそれでよいのである。然し、若し此の慣用語に對し、その語義を深く探らうとするならば、次の如き興味深く又示唆に富む結果が見出されるであらう、ということをごくに指摘したいのである。

二 學問とゆう言葉の負う三つの傳統

我々が日常用いて居るところの『學問』なる言葉は、現代語としての日本語であることわ言うまでもないが、

然し此の言葉若しくわ文字が、日本語若しくわ或る日本語を表現する文字として用いられたのわ、既に古い事柄である。我々わその證據を實に奈良朝に於て見出すことが出来るのである。

即ち推古天皇の十五年（西紀六〇七年）に建立せられた法隆寺は、正しくわ聖德太子によつて『法隆寺學問所』と命名せられて居り、又元正天皇の養老四年（西紀七二〇年）に舍人親王が奉獻せられた日本書紀の崇峻天皇元年三月の條に『以善信尼等一付百濟國使恩率首信等發遣學問』とあり、普通に之をモノナラヒと訓ませて居る。

此等の文字が如何に訓まれたにせよ、ヤマト言葉の「モノマナビ」とその意味内容若しくわ使ひ方に於て、甚しく逸脱して居る様なことわなからう、と考えられるのである。然して今日我々が用いて居るところの『學問』

という文字乃至言葉は確かに此の文字より系統をひくものである。そう考えれば今日の『學問』と言う言葉の内にわヤマト言葉としての「ものまなび」なる意味が、ヤマト言葉が保存せられる限り、國學の傳統が絶えぬ限り、或いは微かでもあれ、包藏されてゐる、と見ることが出来る。その著書に於て學問と書いて之にモノマナビと振假名を施した本居宣長翁は、そう古い人でわなない。然しながら此の文字は大陸より傳えられたものであつて、當時の日本に於て、此の文字を如何に用ひようと、大陸に於てそれが既に負つてゐた意味内容を盡く剝脱せしめられたとわと思えない。して見れば、所謂漢學の傳統が存する限り此の言葉は大陸に於ける用法をも、自らの性格を構成する要素として今に含んでゐる、と言わねばならぬ。

ところが、此の言葉は明治以後西歐語の Science 或わ Wissenschaft の譯語として選ばれたが故に、從來の意味内容に更に西歐語のそれを加えたわけであつて、誠に複雑な性格を持つた言葉として、明治以後今日に至るまで用いられて来た次第である。

即ち、今日我々が用いるところの『學問』なる言葉は、和・漢・洋三つの源泉より流れ出でた意味内容を一身に

包攝して居るのである。私未だ學問とゆう言葉に對する相互の一義的な解釋の仕方の相違から生ずる無益なる議論を聞いたことがない。然し若い學生達の間に於て此の『學問』という言葉と同様、和・漢・洋三種の意味内容（迦微・神・God）を一つに包藏する「神」という言葉を媒介として爲される議論が、往々にして相互に異なる一面の意義の固執、若しくわ無自覺なる混淆より解き難き葛藤を生ずることを私わ知つて居る。従つて此の様なことが、『學問』とゆう言葉を契機として絶對に生じないとわ保證することが出来ない。そこで私わ此の言葉の源流を探り、以て今日に於ける我々の使用法を明確なる自覺にまで持來して見たいと思ふのである。

三 邦語の傳統

『學問』とゆう言葉の意味の一つの源流は、ヤマト言葉のモノマナビとゆう言葉である。さてモノわ古くわモノベ（物部）、モノノフ（武士）、モノノグ（武器）、モノケ（妖怪）の如く用いられて、新しくわモノゴト（物事）、モノゴコロ（物心）等と用いられて居るが、モノマナビと言う時のモノわマナビの對象物という程の意味であつて、接頭語的に用いられて居るのであつて、此の言葉の主要部即ち語幹はマナビである。

さて、マナビはマナブ(學ぶ)の名詞形であり、マナブはマネブ(眞似ぶ)即ち模倣することである。ニセル(似せる)ことである。ニセルは、ノセル(乗せる)で、之は他動詞であるが、自動詞でわニル(似る)は、ノル(乗る)である。而して似るとゆうことわその形が範型と同様となること、範型と重ね合せて一つに見えること、即ち範型から逸脱せず、その上に乗ることである。斯くしてニルは、ノル(乗る)であり、ノツトル(則る)はノルより名詞化せるノリ(法・則・範・度)がノリトル(則取る)と熟し、更にリが撥音となつたもので、法則に従う、或物に範を取るということである。即ち、ノリとかモノとかに即することである。即物ということである。斯くして我々わマナビわ物に即すること、モノマナビわ即物なりと言ふことが出来る。

之に對して人わ或わ余りに牽強である、附會であると評するかも知れない。然し、それわ今日の我が國に於ける言語學乃至わ國語學上の研究成果を知らず、又言語の底に深く思想とか哲學とかを見る力の無い人の言とも稱すべく、右の所論が、日本語の音聲上の變化をそれ等の語が本質的意味聯關も失はずに、それぞれの言葉として轉化成立して行く場合、概ね五十音圖の音行(ア行とか、

カ行とか)の垮内に於いて行はれる、とゆう原則を知らぬことに基くものであらう、と考へるのである。

四 漢語の傳統

學問とゆう文字わ、既に古く、種々の古典籍の内に埋もれて大陸より日本に傳えられたのであるが、大陸に於いてわ一體如何に理解され用いられてゐたであらうか、我々わそれを大陸の古典籍に訊ねなければならぬ。

先づ「說文解字」に依れば「學覺悟也」と見え増韻には「學受教傳業曰學」とあり、朱子わ「論語集註」に「學之爲言效也」と注記してゐる。また論語爲政篇に「子張學于祿」とあるのを一般にわ「子張祿を于下むるを學う」と訓ませてゐるところから考へると、學の字は古くわ問の字と略同様に用いられてゐたであらう事が分る。即ち「說文解字」によれば「問訊也」であるから、「學問」と熟しても、その要義は既に「學」の一字に於いて盡されてゐると言つてよい。即ち大陸に於いてわ學問とゆう言葉わ、教を受け、效い、悟る、とゆう程の意味であり、我が國に於けるモノマナビなる言葉と同様極めて實踐的な性格を有するものであつた。

そこでわ受け教えを、效いそして悟るのである。所で「效う」とゆう事は、普通反復して練習するとゆう意味

に解せられているが、其れわ言葉の深い意味に於て、一定の規程或わ受けた教に忠實に従ふんとすることである。

その過程に於いて、一般的にわ反復練習することが要求せられるのである。ところで、規程に従う、教に従う、という事わ、ノリに即すること、モノに即すること、即ち即物とゆうに外ならない。それでわ大陸に於ける、學問なる言葉わ、ヤマト言葉のモノマナビと全く同じ意味の言葉であつたかと言うとそうでわない。同じく即物と言つても、その「物」わ、大陸に於ける場合わ、日本のそれが極めて自然的であるのに對し、極めて人爲的な察附氣が纏綿したものの即ち、師弟相承の教學的なものである。「大學」に『欲誠其意者、先致其知、致知在格物』という様なことが見えてゐるが、此處にゆう「致知」わ、所謂學問に徹底する、と言ふことと考えられる。でわ學問に徹底するとわ如何なることか、と問うに、それわ「在格物」と答えられて居る。然らば「格物」とわ如何なる意味であるか。古來この「格物」の「物」の字に就いてわ種々異議が存したのであるが、私わ之を「法」の意と解する立場を取りたい。又格は「通達」と解すれば、「格物」わノリに通達するとゆうことである。從つて私の言ふところの「即物」わ、大學にゆうところの

「致知」即ち「格物」であると稱して良からうと思ふのである。

五 西歐語の傳統

嘗つての頃、それに對する譯語として『學問』なる言葉が選ばれたのわ、英語では Learning, knowledge, science 等であり、獨語は Studium, Gelehrsamkeit, Wissenschaft 等であろう。然し今日の我々に於いてわ、學問とゆう邦語に對する歐語として、先づ意識に上せられるのわ、Science 並びに Wissenschaft の語であろう。とゆうことわ『學問』なる言葉の意味の一つの源泉が他の語でなく、此の Science 並びに Wissenschaft なる語に在る、と言ふことである。然らば彼國に於いて、此等の語わ如何なる意味、用法を與えられてゐたのであろうか。

先づ Science に就いて考察する。Science なる語は、拉典語の Scientia より轉化せるものであるが、その scientia わ scire (知る) とゆう動詞が名詞化せるものであつて、知ること、知識、學問とゆう程の意味に用ゐられてゐたのである。從つて Science の原義の内には、今日之が負つてゐるが如き、科學、或わ理學、自然科學等の意味は直接にわ存在しなかつたのである。

然し此の言葉が、學問とか知識とかゆう一般的意義の外に、斯る意味をも負うに至つた所以わ、西歐に於ける學問の歴史の現實に於て、嘗つて自然科學乃至わ科學が最も優位を占めた、という事實に在るが、今一つにわ、此の言葉の原義たる *science* わ單に知ることのでわなく、實證的に知るとゆう事で、あて推量に信するのわわない。たゞ頭の中で主觀的に考量するとゆうのわわない。實地について知る、とゆう事であつた、とゆうことゝ聯關があると思われるのである。何故なら、實證的にとか實地にとか、ゆうことわ、科學自らの本質として、主張した所であるから。

次に *Wissenschaft* わ動詞 *wissen* (知る) より轉化して出來た名詞であつて、矢張り知る事、知識、學問等の意味を持つのであるが、*Wissen* の本義わ「見る」であつて、觀想的即ち理論的認識と言つた性格が存する。是れ、實證的であると共に理論的であることを要求する近代科學に對して、その呼稱として此の語が採用された所以であらう。

六 三つの傳統の統一

我々が今日用いてゐる所の『學問』とゆう言葉わ、右に見た如き、和・漢・洋に亘つて幾つかの言葉の傳統を

一つに統一したものであつた。之を表示すると次の如くである。

| | | | | | |
|-----|--------------|----|-----|----|-----|
| 邦語 | モノマナビ | 模倣 | 實踐的 | 即物 | 自然的 |
| 漢語 | 學問 | 學習 | 實踐的 | 格物 | 教學的 |
| 英語 | Science | 知る | 實證的 | | |
| 獨乙語 | Wissenschaft | 見る | 理論的 | | |

右の表を眺める時、我々わ東洋と西洋の相異、同じ洋の内でも日・漢の比較、英獨の對照等、興味盡きせぬものがあるが、今本來の學問に於いて具備さるべき諸性格を考へつゝ右の表を見るに、それぞれの語は、それぞれ一義的にしかそれを含んで居ない。然し、その全部を統合する時わ、略々、完全なる性格と言ふことが出来る。今日我々が用いる『學問』なる言葉わ言葉としてわ、斯る意味に於て、世界に類を見ぬ程に、圓滿具足せる言葉である、と言わねばならぬ。

我が國に於ける現實の學問が、果してどれだけに此等の性格を統一してゐるか、私わ言わなない。然し我が國の學問の現段階わ、まだまだ自らの性格を實證的、理論的、實踐的たらしむるべく努力せねばならぬところに在ると

ゆう事丈的確かであると思う。と同時に自ら最も近しい傳統の中に於いて、今日社會が學問に最も要求する所の「實踐的」とゆう性格を自覺し、又「卽物」の精神を發見し得た、とゆうことわ何と心嬉しくも力強いことであらうか。Zu den Söhnen selbst! (事象そのものえ!) なる標識わ、西歐に於いてわ程遠からぬ頃に、最も嚴密なる學問卽ち哲學の態度として、學界の一尖端によつて提唱せられたのであるが、それわ、東洋の、分けても我が國に於いて言うところの「卽物」の精神に通うところ多きものである。

西田幾多郎博士わ嘗て、本居宣長翁の「其はたゞ物にゆく道こそ有りけれ」(直毘靈)の「物にゆく」を「物の眞實にゆく」とゆう意味と解せられ、そこからして次の様に言われた。「何處までも物の眞實に行くと言ふことは、科學的精神といふものも含まれてゐなければならぬ。それは己を空くして物の眞實に従ふことではなければならぬ」(傍點筆者)。西田博士が斯く言われるところの「物の眞實にゆく」とゆうことわ、言葉を換えれば、「格物」、否「卽物」とゆうことでなければならぬ。

斯くの如く、哲學、科學を問はず、學問の世界に於いてわ、「卽物」とゆうことわ、實に根源的精神、根本的

態度であると言わねばならぬが、それを我々わ邦語の傳統の中に見出し得たことわ、一つの大いなる喜びであると共に、又我々をして、我々の學問を斯くあらしむべく努力せしむるところの鼓舞素ともならなければならぬ。

七反 省

此の稿を終るに際し、我々わ最後に、右の考察により、はしなくも我々の眼前に露呈せられたところの、言葉の上今まで表現せられたる東洋人種の學問領域に於ける弱點を顧み、深く自戒するところありたいと思う。と言うわ、邦語の原義たる模倣、漢語の原義なる學習わ、何れも、その態度の非創造的、回想的なることを示すものに他ならない。卽ち學習わ既成の知識體系卽ち古聖賢の教の習得であり、模倣わ既成の文化の模寫卽ち嘗ての文化制作の反復に過ぎない。何れに於いても、そこにわ進歩性も創造性も見出すことは出来ない。單なる「溫古」、單なる「稽古」の内にわ、何等の進歩性も、創造性も存在しないのである。

然し溫古といひ、稽古とゆうも東洋人わそれを必ずしも、單に回顧的に終らしめたのではなく、之を媒介として「知新」に、「照今」に轉じようとする努力は忘れなかつたのである。否知新、照今の契機として、溫古と言

い、稽古と言つたのであらう。然し、全體として見ればその運動は矢張り過去の埒内に低迷して居たと見える。何故ならそれは過去の範疇に於いて物を見、物を考えることに他ならぬからである。そこにわ、未知の領域を未知の方法で開拓する、とゆう未來志向性、即ち勝義に於ける積極性と創造性が缺如して居た、と言つて良い。

それでわ、我々わ『學問』とゆう言葉が内に包むところの右に見た如き意味内容をそのまゝに何時までも引きずつて歩まねばならぬであらうか。我々わ學問の或る領域に於いてわ濫古知新、稽古照今という態度の無意義でない事を知つて居る。然し此等は所詮過去の側に立つものである限り、之を捨離しないまでも、之に代つて未來の側に立つもの、未知の領域を未知の方法で開拓する態度を確立しなければならぬ。西歐語の *sovereign* 或は *Wissenschaft* わ此の要請に應じ得るものであらう。然し、之を猶東洋語の内に求める事わ出來ないであらうか。

我々は残念乍ら、それを漢語の傳統の内に見出すことが出來ないが、邦語の傳統に於いて考へる時、マネビの對象、即ち模倣の範型となるものは、必ずしも、古聖賢の教へとか、既成の知識、文化に限ることのないのに、注目せねばならない。即ち、その範型は、數學、文化に

限らず、此等を含めて廣く、西田博士の言われる「物の眞實」であつたとすれば、こゝに無限自由の世界が開け、之を眞に深く自覺する時、邦語のモノマナビわ、單に過去の側に立つ模倣にのみ止まらず、未來の側に立つ創造に轉換することも可能である。即ち、科學、並びに科學技術的生産の可能性も樹立せられるのである。

即ち斯く考え來る時、嘗て、我が民族は學術、技藝に於ける模倣の巧妙迅速の故にその創造力に於いて却つて缺くるところ大なりとし、自ら嘲りさえもしたのであるが、それわ自らの傳統を深く顧みざる態度と言わねばならぬ。即ち我々の傳統に於いてわ、マネビわ單なる模倣を超えて「物の眞實にゆく」或わ、「即物」とゆう深き意味を宿してゐたのである。

弱點を裏返せば、それわ直ちに長所であると言われる。我が民族に於いてもその弱點と見られる模倣を、マネビを樞軸として纏うとき、それは即物とゆうことであり、物の眞實にゆくとゆう事である。従つて我々わ、邦語の此の傳統と共に、此等の傳統を一つに統合せる『學問』とゆう言葉の意味を深く體認し、此の言葉の含む意味を完全に具現せる學問の樹立に邁進したいものである。

註、西田博士わ、宣長翁の所謂「物にゆく道」なる言葉の眞意を誤解し、その誤解に基いたまゝに之を補足して、「の眞實」なる言葉を補足挿入されたのであらうが、翁の所謂「物にゆく」なる言葉わ、實わ博士の解せられる様な意味のものでわなかるう。と言うのは「直昆靈」には、その語に續けて、「物のことわり、あるべきすべ、萬の教へごとをしも、何の道くれの道といふことは、異國のさだなり」とあり、又「道」の意味の説明として、「美知とは、…山路野路などの路に、御てう言を添たるにて、たゞ物にゆく路ぞ」とあり、更に翁の著「玉勝間、七の卷」などには、「おのれさいつころ大阪にゆきて、此高津のわたり物せしをり、いかで立よりて、此はかをもをがまばやと思ひしを、日くれなたになりて、…道いそがれて、え物せざりきかし」とあり、此等から推して、翁の「物」とか「ゆく」とか「道」とか言う語の眞意を解すべく、博士の様に考へるのは、些か穿ち過ぎ、若しくは牽強の説と言わざるを得ない。従つて博士が「物の眞實にゆく」なる語の出典を宣長翁に求めず、獨自の造語として用いられれば、問題はなかつたのである。